

オ. 普通教室又は普通教室と連続したスペースで行う学習活動に関する意見

No.	ヒアリング意見	教科
1	学年で一斉に説明してクラスに分かれて活動することは基本的にクラスで活動するので無い。調べて発表することは多くの学習で行われている。普通教室と家庭科室で学習内容によって使い分けを行っている。教室を広くする、連続したスペースにおいて裁縫など学習の安全性を確保できれば普通教室周りで実施できることはある。水周りがあるとよいが、廊下にも手洗い場があるので無くてもならないものではない。洗濯、掃除の仕方を学習する時には水周りが必要となる。	家庭
2	低学年スペースには水道があるとよい。廊下に出て行ってしまうと担任が見ることができない。パオも子どもにとっては安心できるスペースである。オープンスペースは音が気になる。空いているだけで落ち着かない子どももいる。	生活
3	続けて何かを作る場合は、普通教室だと片付けないといけないが、作業を継続できるスペースがあるとよい。大きな音やにおいのする活動は無い。	生活
4	発表する時には、まち探検の大きな地図を模造紙や紙芝居にまとめて発表することもある。限られたスペースで掲示している。ICT機器の活用について、子どもたちに活動を思い出させることは重要だと考えているので、振り返るために映像を使うことはある。	生活
5	低中学年では教室で活動することが多い。5、6年生が主に図工室を使う。ただし、低中学年も図工室にしかない機械類を使う時は図工室を使う。高学年も教室を使うことが多い。	図工
6	教室で図工を行うにあたって、教室に流しがあるとよい。また、教室から出てすぐの所にどの教室からも使えるような流しがあるとよい。	図工
7	教室で製作する場合机が狭い。画用紙、絵の具、パレットを置いて展開できるのが、図工室のメリット。教室の場合画用紙の上に絵の具やパレットを置いている。これはあってはならない指導だが、ハード面でやむなくそうしている場合が多い。	図工
8	鋸を使う活動は普通教室ではできない。図工室なら大きな机に万力でしっかり固定することができるが、普通教室だと部屋を傷つけることや、安全面でも問題がある。	図工
9	匂いが出ることはほとんどない。ニスや接着剤にもにおいが出ないものを使うが、子どもによっては酔ってしまう場合がある。	図工
10	大きな音が出るのは、糸鋸盤、電鋸盤、金槌を使う時。	図工
11	小学校の場合には学年に関わらず、普通教室に水周り、保管スペース、多目的スペースがあるとよい。	図工
12	廊下やオープンスペースなど普通教室周りの連続したスペースは十分活用できると思う。	理科
13	廊下はグループ活動を行う上で普通教室からはみ出す形で利用していることもある。	外国語活動
14	現状では狭いが他に場所が無いので普通教室で授業を行っている状況だが、机の中には荷物があり、その状態で机を移動させるのは大変なので、別に専用教室があるとよい。	外国語活動
15	普通教室で授業を行うが、ある程度物理的な空間を持つ上ではもう少し広いスペースがあるとよい。今は普通教室しかないの、普通教室内だけで行っている。	国語
16	新しい学校を作るにあたっては、今の教室で行われている環境があれば、算数に関して困ることは無い。普通教室に授業できるような広さ、机があればよい。	算数
17	表現や鑑賞など時数の分けをすることはできない。低学年は鍵盤ハーモニカや打楽器が中心なので、人数分のセットを普通教室に持ってきて使っている。低学年は、普通教室でも音が出ない設えであれば活動できると思う。音楽では机は必要としない。学校の特性として、落ち着きを持たせるために敢えて机を置くこともある。机と椅子が必要な場合もあるので、通常は椅子のみで、必要に応じて机を持ってきて使用できるようなものがよい。少し余裕のある広さがあり、動くことができるとよい。	音楽
18	低学年は広めの普通教室で音が漏れなければ普通教室で授業を行うことができる。普通教室と連続したスペースでグループを単位として活動することがある。低学年は体を動かす活動として広いスペースが必要となる。中学年、高学年になると音楽づくりは試しながらの活動が行われている。	音楽

カ. 黒板の使い方、活用に関する意見

No.	ヒアリング意見	教科
1	見学に行く場合に見学の目当てを考慮して、学習計画、学習問題を解決することはあり、ある程度掲示するスペースがあるとよい。ホワイトボードについては、常に使うのではなく、例えば多目的教室に置いてあるものを使いたい時に持ってくるのができればよい。社会では資料の提示が多いので、黒板からはみ出ることが多い。個人的には黒板から前方の入り口付近にワイヤーを張り、そこに模造紙などを掲示することがあった。50インチのテレビはあるが、後ろの方からは大きく見えないので、資料を貼り付ける場所があるとよい。教員によってはホワイトボードで代用する人もいる。黒板プラスアルファがあると便利である。	社会
2	黒板の真ん中にフックがあり掛図を下げることもあるが、そこに掛図を下げると黒板の書くスペースが少なくなってしまう。そういった時に黒板の横に掲示するものがあるとよい。社会においては、日本地図、世界との繋がりとして世界地図を掲示することがある。地図を掲示するスタンドを使ったことはあった。子どもの視線を考えると黒板と連動して使用できるように掲示ができると見やすいと思う。	社会
3	板書をしない授業はよい授業ではないと考えている。子どもたちの言った言葉が黒板に載ってくることは大事である。	社会
4	双方向で表現することが大事であり、現段階では板書という手法を取っている。子どもの発言が効果的に授業で活用されることを示すことが大事である。	社会
5	黒板に書いたものを丸写しする必要はないが、自分にとって必要なものをメモすることは大事である。黒板をカメラで撮影して配っても分かるものではないと思う。自分でまとめて書く力をつけていくことが大事である。	社会
6	黒板は自分の意見がどのように反映されているか、瞬時に記載するためには必要である。子どもと一緒に授業を作っていく上では板書は必要である。	社会
7	子どもが気付いたこと、予想、話し合った結果をまとめるなど子どもたちの声をまとめて板書を行っている。掛図で黒板の記載するスペースが制限されるとやりにくい。おそらく他の教科も同様である。書いて消してと行うと残らないので、教員のスキルとして勧めていない。黒板1枚で1時間の授業を行うことが子どもにとって優しいものだと考えている。	社会
8	小学校では上下スライド式の黒板（UD黒板）があるとよい。理科室では大学の教室のようなものはあるが、普通教室では1面で勝負をしているので基本的には必要ないと思う。子どもたちが使うこともあるので上下に動かせればよいと思う。	社会
9	黒板は消さないように話しをしている。授業中板書を写すことはしないので、消してしまうと授業の過程が分からなくなってしまう。ワークシートに自分の考えを書くことはある。	道徳
10	掛け軸等を利用する場合、黒板のスペースを確保するため、導入の部分で説明をしたらその後は片付けてしまうこともある。	道徳
11	資料や黒板は子どもたちに狙いについて考えさせるために必要なもの。そのために、黒板は消さないで1時間で黒板1枚を使う。資料を張るスペースや子どもたちの発言を記入していくための板書計画は、教員が事前に準備をしている。	道徳
12	掲示するような作品を作ることは基本的にない。あるとすればワークシートを掲示してお互いに見合うこと等。木の絵を教室に貼って、そこに自分の心が育ったと思ったら紙に書いて張っていくという活動を行っている場合もある。	道徳
13	黒板は本日の目当て、手順、時間配分、用具の使い方、使う材料、作品イメージの共有等に使っている。何クラスも同じことを繰り返すので、模造紙に掲示物を作って置いてそれを使う場合もある。作品を黒板に掲示することもある。	図工
14	ホワイトボードより黒板の方が使いやすい。マーカーの消費が激しいのでホワイトボードは意外と使いにくい。	図工

参考 4. 打合せ・視察記録

No.	ヒアリング意見	教科
15	1つのテーマの単元数は題材によって異なる。前半で問題、疑問、モノづくり、実験を行い、どのように進めていくか計画を立てて、実験や観察を行い、そのデータを用いて考察し、最後にモノづくりを行うことが一般的な流れである。実験の回数は題材によって異なる。当初の課題、経過、まとめについて黒板を使って説明していくと書くスペースが不足してしまうことがある。子どもの作る仮説は模造紙やホワイトボードなどを使い、黒板にはそこからまとめを記載することになる。	理科
16	黒板については、授業1枚としている。子どもが振り返ることができる、どのような思考をして今ほどの段階にあるか確認する上では黒板のサイズはある程度の目安になる。何かで記録し、次の授業で使用することもある。50インチテレビを使って教材などを提示するのであれば見やすいように向きを変えなければならないので、黒板が隠れてしまうことがある。	国語
17	黒板の使い方として、課題を出す、子どもたちの意見を出す、最後にまとめるといった内容を1つの授業あたり1枚の黒板で行っている。算数では1時間目に学んだことを2時間目以降に使う事になるので、1時間目の内容を掲示しておくことは必要である。振り返りとして学んだことを掲示している教員もいる。そこに關しては学んだことなので教えてよいものとしているが、学んだことが何かということノートや掲示物で振り返ることになるので、「振り返り」が重要である。学習の跡が残っている方が子どもにも教員にもよいと思う。	算数
18	黒板は可視化するために使っている。可視化したものを時系列で使う、鑑賞の時に出了意見子どもたちは忘れてしまうので、音楽を形づくっている要素を聴きとり、「リズムが滑らかになる感じ、音色のことだ」など、その音楽の曲想の変化を可視化して伝える時に使用している。全学年共通で行われている。横長に音楽は流れて行くので、ある程度の大きさが必要となる。	音楽

キ. 製作物など掲示、展示に関する意見

No.	ヒアリング意見	教科
1	作品の保管スペースは必須。学年全体で同じ題材に取り組んでいる場合、1学年分の保管スペースが必要になる。図工室は一つしかないのので、教室や多目的室に並べて置いておくことになる。	図工
2	作品の展示は教室の廊下側が多い。教室には他教科の展示物もあるので、図工の作品は連結クリップ等で廊下側に展示している。廊下には画用紙系のものでないと飾れないので、図工の作品を展示することが多い。一つの作品ができれば必ず展示している。立体の作品は教室後ろのロッカーに並べるケースが多い。置ききれないこともあるので、多目的室にもって行くこともある。	図工
3	作品の展示が廊下になるので、ワークシートを持って、自分のクラスに限らず他学年の作品の感想を書く等の交流をする場合に、廊下が授業のスペースになることも可能性としては考えられる。	図工
4	授業参観などに合わせて発表内容をまとめた資料、観察記録をまとめたものを掲示することや、単元が長いので前の授業で行ったことを掲示している学校もある。教科教室になると掲示スペースの確保が課題になってくると思う。	理科

ク. 現在の ICT 機器の活用状況に関する意見

No.	ヒアリング意見	教科
1	50インチのテレビの活用について、比較的使用する方は増えてきている。副読本等の見て欲しい場所を映して説明する教員はいる。	社会
2	紙芝居、写真をモニターに映すことや、導入の中で資料の補足的な説明をするためにICT機器を活用することはある。教材を提示するのが基本で生徒に使わせることはない。	道徳

参考 4. 打合せ・視察記録

3	作品事例の紹介でICTを活用することはある。書画カメラやモニター等を使って、手順の説明をすることもできる。中学では50インチモニターでは小さいので、黒板にボードを張ってプロジェクターで映して使っている場合もある。	図工
4	ICTの活用として、資料性のある画像や映像を見せることは効果的なので50インチテレビは活用している。デジカメを使い、授業中の実験や観察の様子を撮影し、テレビに投影することがある。顕微鏡もデジカメで撮影してどのようなものが見えるか、何を見てもらいたいかという見本として見せることがある。実験の方法（器具の使い方含む）をテレビに映しておくことがある。	理科
5	リズムで英語を覚える、英語のフレーズを覚える歌を学ぶこともある。文科省ではデジタル教材を用意し、歌やチャンツがあり、担任が細かい教材を用意しなくても授業を行うことができるので、ICT無しでは授業を行うことができないと思う。50インチのモニターを使って映像などのデジタル教材を使っている。但し、50インチテレビではモニターとして小さい。プロジェクターで大きなスクリーンに投影して教材を使っていることもある。できればプロジェクターの準備が大変なので、下からではなく天井にぶら下げて投影できるとよい。外国語活動専用の部屋においてもプロジェクターがあるとよい。	外国語活動
6	50インチテレビは、挿絵、写真を映すことや、実物投影機などで子どもの作品を投影することもある。場合によっては、子どもの調べたことを伝えるために活用していることもある。最近ではデジカメで子どものノートを撮影し、拡大してテレビに表示している。多くの教員は50インチのテレビを一般的に使用している。	国語
7	50インチのテレビは課題の導入部分で映像を提示し、可視化させるために使用している。高学年の具体から抽象になる時にICT機器を活用できるとよいが、実態としては少ない。国の方で力を入れているのは統計領域である。本来的には課題解決型の授業になるが、資料の中から何を読み取ることができるか。資料の調べ方で度数分布を行う。6年生は柱状グラフを行い、中学校ではヒストグラムを行っている。算数という視点だけでなく、社会での活用という視点も加わってきている。	算数
8	電子音になることの弊害もあるので、音楽づくりでは逆に行わない。見えないものなので、可視化がキーワードである。低学年は短い曲で段々、長い曲になっていく。それは発達に伴っていないから忘れてしまうからである。合奏における適切な音を選ぶ時にも大事である。可視化したものが、耳だけでなく可視化した教材が役に立つ。	音楽

ケ. 今後の ICT 機器の活用状況に関する意見

No.	ヒアリング意見	教科
1	すぐに情報を調べたいという子どもの欲求に対し、タブレットを使って普通教室で調べ学習を行うことは考えられる。50インチテレビは教員の教材提示装置として使用しているが、これから先は子どもたちが操作し、発表で使うことが考えられる。	社会
2	今まではマジックと模造紙で発表する資料を作成していたが、常に発表ができるように教室にプロジェクターを設置するなどICT環境を整備していくことが各教科において求められて来ると思う。	社会
3	今後の活用としては、小学校でもタブレットが利用され、中学校では研究されていて、今までは調べたものを黒板に書く、模造紙に書いたものを貼っていたものを写真で撮り、データを共有フォルダに入れてグループで見ることができるといったものがあった。効果については、今後検証していく予定である。小学校では研究の事例は無い。	理科
4	自分の考えをタブレットで書いて送信すると黒板などに映すことができるようになる。考えたものが直ぐに可視化され、プリントすることで記録ができると教員は便利だと感じることができる。今はデジカメで撮影したものを50インチテレビに表示して対応している。思考ツールと表現するツールが教室内にいると教員は助かると思う。言語活動を行うのであれば、子どもたちに考える、学習指導要領にある言語環境を整えるというのは、子どもたちに考えさせるツールを用意することである。単に考えて下さいと言っても考えたことが残らなければ深まっていけない。ワークシートやホワイトボードに振り返ることができないといけな。考えを共有するのであれば発表する、伝えるモノが無ければ伝わらない。	算数

コ. 特別教室（教科専用教室）に関する意見

No.	ヒアリング意見	教科
1	洗濯実験として汚れをつけてどのくらい汚れているか調べる、どのように落とすか学んでいる。薬剤の使用や水周りが必要となるので家庭科室で行えるとよい。換気、アイロンがけ、洗濯などそれぞれ1時間ずつくらい行っている。換気は夏と冬のくらしの違いを学んでいる。家庭科室でなければ実施できないものとしては調理、ミシン（15時間）と換気、アイロンがけ、洗濯（3時間）になるので合計で20時間弱となる。	家庭
2	家庭科室と準備室があり、作業台が6つではなく8つあるとよい。あとは作りつけの戸棚があるとよい。あとはミシンを最低20台使える、できれば40台ミシンを使うことができる電気容量が必要となる。昔はホットプレートや炊飯器を使わなかったが、現在はこのような便利グッズを使っているの、電気容量の確保が必要である。	家庭
3	調理台についてはガスコンロでよいと思う。安全面ではIHがよいが、火は触ると危ない、ガスの燃えている様子を見ることも必要である。	家庭
4	教員が教えるテーブルに調理スペースが無くても説明できるスペース（例えば教員の机の前にスペースを空けて集まれるスペースを設けるなど）があるとよい。家庭科室は総合や生活、PTAや地域に開放する、バザーや地域のお祭りに使うこともある。教科だけではない。新しい学校では地域開放を行っていることもある。	家庭
5	窓側に調理スペースが寄せられている家庭科室はあるが使いづらい。でき上がることが目的ではなく、作る過程を学習する上では適さない。調理台の周りを子どもが囲めて教員が見て回れるようなものがよい。	家庭
6	幼稚園や保育園に近い広い机、座って何かできるスペース、自分たちでグループを作って座れるスペース、場そのものを子どもたちが作れるスペースがあるとよい。	生活
7	フリースペースとして、机も軽くて子どもでも組み合わせられるものがあるとよい。ガスは必要ではなく、ホットプレートやオーブントースターがあればよい。場合によっては家庭科室を利用することもある。ダイナミックに何かができるスペースがあるとよい。動かない机は困る。	生活
8	水があればホットプレートを使って調理をすることもできる。材料については切ったものを家庭から持ってきてもらうようにしている。切ることは指導事項ではない。自分でやらせている学校もある。	生活
9	常に図工室が稼働している状態ではない。5～6時間かかる題材については、一月通して図工室を使うことになり、全学年で同時期に使うと足りなくなる。	図工
10	高学年になるほど図工室を使用する活動が増える。低学年でも版画等で使うことはあるが、他学年との時間調整が付かず教室で行うこともある。ただ、汚れや器具の移動（普通教室に持ってくる）を考えると、図工室を使う方がよい。特殊な器具を使わない場合、小学校では中学校ほど教室移動が一般的でないこともあるので、できるだけ教室を使っている。	図工
11	図工室を年間何コマ使うかは学校次第。図工の場合授業が単元ではなく題材で構成されており、題材については学校や地域の状況に応じて設定することになっている。身に付けるべきことは決まっているが、そのために何の題材を使うかは決まっていない。図工室をほとんど使わない学校も常に稼働しているような学校もある。	図工
12	低学年の子は教室移動させるだけでも、動きが高学年とはかなり違う。低学年は教員が常に付いていないといけませんが、高学年であれば図工室に集合することもできる。	図工

参考 4. 打合せ・視察記録

No.	ヒアリング意見	教科
13	特別教室でないとできないのは、版画、墨を使ったような表現や木切れを使ったり、金槌で釘を打ったり、小刀を使ったりする題材等である。版画は1～6年まで全てやる。低学年は紙版画を行う。木版画を彫る作業は中高学年で行う。発達段階に応じて版画にも色々なバリエーションの題材を設定している。	図工
14	半屋外スペースがあれば、作品を乾燥させることや、色水を作って並べる等の作品作りに使える。	図工
15	図工室は机の大きさがメリットでもあるので、6人ごとの大きな机が6台あればよい。学習指導要領が改訂されても、図工室の設えとしては従来どおりで問題ない。	図工
16	小学校の図工室には展示スペースは必要ない。作品が保管できる収納、明るい窓や十分な流しがあればよい。	図工
17	生活科室と図工室で共通性は高いが、椅子と机はあった方がやりやすい。	図工
18	演示実験を行う上で、教員の机の大きさ（資料と演示する実験器具を置く場所）、子どもが見やすい高さに配慮が必要となる。他の学校で子どもの使う机を5台にし、教員机の前を子どもが集まれるように空けているものがあるが、そこに必要に応じて可動機を置くこともできると思う。	理科
19	理科室における理想的なグループの単位としては4人である。理科机は真ん中にガスと水場があるので、1つのテーブルで2班（8人）が使用できればよいと思う。	理科
20	中学校で2つ理科室がある場合としては、同じものが2つある場合、物理・科学と生物・地学の道具を分ける場合がある。センターの研修室のように実験を行う机が前を向いている机の教室と通常の理科室と分けることは考えられる。	理科
21	理科室の机が半円型になっているもの（センターの第2理科室）は、顕微鏡を使うのであれば利用しやすいが、個で行うよりも力を借りながらグループで行う方がよいと思う。	理科
22	外国語活動に力を入れている学校では、国際理解教室として外国語活動で使用できる部屋を用意している。	外国語活動
23	活動場所として、余裕教室が無ければ普通教室で授業を行っている。常に多目的室で授業を行っている学校では、そこに教材を常設しておくことができると思うが、通常、他の用途で多目的室を使用しているので、広いスペースを学校の中で調整して使っている。国も外国語活動に力を入れているので、国際理解教室などに設定すれば外国語活動だけでなく社会でも使用することができる。ピクチャーカードなど教材が多く、保管場所が課題となっているので、専用教室が必要である。	外国語活動
24	専用教室について、机はあった方がよい。聞いて理解する活動で書き込みや、手紙を作ることもあるので、必要に応じて机を寄せられるスペースがあるとよい。動く活動が多いので、広さは普通教室より少し大きい方がよい。道案内などは継続して行うものではないので、多目的室を利用すればよく、常に広いスペースが必要となる訳ではない。	外国語活動
25	外国語活動専用の部屋の必要性として、擬似的な異文化の空間として意識できる設えがあることで、普段の環境とは異なる体験をスムーズに行うことができる。社会など各単元と共有して使用する形もできるかもしれない。教材は学年で共通で使用するが、置き場所が決まっていないので、実際に使う時に見つからないことがある。外国語活動で利用する国際理解教室の中に教材を置くことができればいつでも使用することができる。	外国語活動
26	第2音楽室については、無いので普通教室で行っている。低学年については、学習の場の環境の変化で落ち着かないという問題があり、普通教室で行うという面もある。オープンスクールでは音の問題があり、授業を行うことは難しい。例えば鍵盤ハーモニカを吹くと何も聞こえない、同じ時間に音楽をやっても何も聞こえない。本当は全ての授業をフォローできる第2音楽室があることが望ましいが、稼働率の観点からもつたいないということもあると思うので、一番よい方法としては多目的室を窓が閉められる部屋として設けることも考えられる。鍵盤ハーモニカの練習をするので多目的室を利用できるようにするなど、普通教室の近くに部屋を設けていることが望ましい。	音楽

4. 7 デザインワークショップ実施概要及び記録

4. 7. 1 ワークショップの概要

(1)目的

協働の小学校づくりを推進する「場づくり」

- ・ 教員、行政職員、建築家による意見の共有を目指し、協働に向けた「場づくり」の土壌を作る。
- ・ 小学校における学習活動、施設の利用状況を踏まえ、普通教室、特別教室等の間取り、設え、学校全体の構成に係る学年クラスターの考え方などについて議論し、教育現場の意見を建築計画に反映させる。

(2)基本計画検討委員会におけるワークショップの位置づけ

基本計画策定に向けた参考意見とする

- ・ 本新設小学校の建築計画についてワークショップでの意見交換の内容を集約し、「新設小学校基本計画」策定の際の参考意見として考慮する。
- ・ ワークショップでの意見を今後の川崎市の小学校計画における共有資料とする。

(3)出席者

出席者	備考
指導課指導主事 幸区・教育担当指導主事 宮前区・教育担当指導主事 カリキュラムセンター室長 情報・視聴覚センター指導主事	第 1, 2, 3 回
会場となる学校の教員	第 1, 2 回 御幸小学校教員、第 3 回 はるひ野小学校教員
首都大学東京上野理事	第 1, 2 回
教育環境整備推進室	司会進行
建築家	
設備・環境専門家	

4. 7. 2 ワークショッププログラム

回数(日程)	第 1 回 (9/27 御幸小学校) 15:00～17:00	第 2 回 (10/1 御幸小学校) 15:15～17:00	第 3 回 (10/2 はるひ野小学校) 15:00～17:00
	<p>①オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ワークショップの全体目的、第一回目的・到達点について、事務局より説明。</li> </ul>	<p>①オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ワークショップの全体目的、第二回目的・到達点について、事務局より説明。</li> </ul>	<p>①オリエンテーション</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ワークショップの全体目的、第三回目的・到達点について、事務局より説明。</li> </ul>
プログラム	<p>②自己紹介</p> <p>③基本構想のレビュー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自己紹介</li> <li>事務局より計画条件、地区の現状や課題、普通教室廻りの検討内容について基本構想での検討内容をレビュー</li> </ul>	<p>②首都大学東京上野理事ミニ講義</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>国内外の学校の事例を紹介</li> </ul> <p>③第一回のおさらい</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事務局より第一回での意見を紹介。</li> </ul>	<p>②基本構想のレビュー</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事務局より特別教室廻りを中心に基本構想での検討内容をレビュー</li> </ul>
意見交換	<p>④基本構想の内容について意見交換</p> <p>⑤御幸小学校での取組のご紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>御幸小学校における学年配置の考え方、オープンスクールにおける学習活動、児童支援コア・イーターの取組等を紹介</li> </ul> <p>⑥学年クラスターについて意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学年クラスターの参考例を利用し、意見交換</li> <li>大規模校の運営に関する事例紹介(事務局)</li> <li>自由に意見交換(議論の視点、以下)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>秀逸段階ごとの配置構成の許容範囲</li> <li>多目的室の設置について</li> <li>学級数の増減への対応等(将来の有効活用)</li> </ul> </li> </ul>	<p>④普通教室廻りに関連する事項についての意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自由に意見交換(議論の視点、以下)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>学年クラスターについて</li> <li>秀逸段階ごとの配置構成の許容範囲</li> <li>多目的室の設置について</li> <li>学級数の増減への対応等(将来の有効活用)</li> </ul> </li> <li>普通教室廻りについて                     <ul style="list-style-type: none"> <li>普通教室と多目的スペースの連続性について</li> <li>学習活動に対応する教室の広さ</li> <li>学年に応じた教室、多目的室の設置</li> <li>多目的室を有効に活用するカリキュラム</li> </ul> </li> </ul>	<p>③標準的な授業時数における学級数ごと教科の授業時数に関する資料の紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事務局より、主に特別教室を利用する教科に関する調査結果について報告</li> </ul> <p>④学習活動に関する調査内容の紹介(2)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事務局より、学習指導要領からの検討資料を紹介</li> </ul>
	<p>⑦学習活動に関する調査内容の紹介(1)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事務局より、主に普通教室廻りでの学習活動の調査結果について報告</li> </ul>	<p>⑤教職員に対するスペースの考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>会場となる御幸小学校からの意見</li> <li>知的生産性に関する情報提供</li> <li>参考検討例の紹介</li> <li>自由に意見交換(議論の視点、以下)                     <ul style="list-style-type: none"> <li>教職員のコミュニケーション</li> <li>知的生産性の向上</li> <li>職員の作業場所(職員室、担当教室等)</li> <li>リラックス、リフレッシュ</li> </ul> </li> </ul>	<p>⑤特別教室に関する意見交換</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>主な諸室について以下の順番等で意見交換                     <ul style="list-style-type: none"> <li>家庭科室</li> <li>生活科室</li> <li>図工室</li> <li>理科室1</li> <li>音楽室</li> <li>外国語活動室</li> <li>図書室</li> <li>コンピュータ室</li> <li>特別教室の配置</li> </ul> </li> </ul>
まとめ	<p>⑨まとめ</p>	<p>⑤まとめ</p>	<p>⑦まとめ</p>



#### 4. 7. 3 ワークショップの摘録

##### (1) 第 1 回 デザインワークショップにおける主な意見

ア. オープン型の普通教室、オープンスペースについて（御幸小学校）

- 広々として明るい空間、隣の教室の様子が音で分かる。教室前のスペースが学年の活動スペースとして使えるので、学年の実行委員会や集会などで使用している。安全管理面としてはオープンスペースの様子が把握しやすい。
- オープンスペースを学級スペースとして使用することがある。普通教室よりも広く使える。また、音の気になる子どもに対しては可動家具を間仕切りとして使うこともある。可動家具を学級担任が自由に動かしながらスペースを活用している。
- 音の問題としては、普通教室のオープンスペース側の壁が少し下がっているが、それだけで音が小さくなる。一步外に出ると子どもたちも声が聞き取りにくくなると。
- オープン型の普通教室はと子どもたちに落ち着きが無く、集中できないのではないかというイメージがあるかもしれないが、子どもは順応性があり 1 ヶ月程度で黒板の方を向いて授業を受けられるようになる子もいる。色々な情報は入ってくるが、必要な情報以外をシャットアウトする能力があると思う。オープンスペースも子どもたちの集中力を高める上では有効なのかもしれない。
- 発達障害、特別支援の子どもだけでなく、その前後の子どもへの支援、いじめの早期発見など児童支援コーディネーターとして対応をする上では教室への入りやすさにおいてオープン型の教室はよい。

イ. 学年クラスターについて

- 学校運営上、学年によって階が変わるのは良くないと思う。使い勝手など学年の配置についても考慮していかなければならないと思う。増築した後もクラスターが維持できる方がよいと思う。
- 学年が同じ階に横並びになっている方がよいと思う。学年が変わると教室配置をどのようにするか考える時にも学年はなるべく階を跨がないようにしてきた。
- 学年 6 クラスというのは超大規模で非常に落ち着きが無く、建築空間的に非常に大き過ぎる。4 クラスの事例であっても間に緩衝スペースを設けて 2 と 2 に分ける工夫をして、普通教室前のスペースがあまり大きくならないように計画するのが小学校を作る上での原則である。6 クラスが横並びになっていると、学年でまとまっているといえ、学習空間、生活空間にはならない。3 クラス 3 クラスの間にコンコースを作ることで学年は 6 クラスだが 3 クラスずつに分かれて空間のスペースが和らぐと思う。
- 2 クラス 3 展開、3 クラス 5 展開など少人数分割授業を行うことを想定しておくことが必要である。少人数分割が大きなテーマになった時に、多目的で使用でき教室を学年のまとまりの中に作らなければならない。
- オープンスペースは魅力的な空間なので、子どもたちは走ってしまうこともあるが、学年でダイナミックに総合的な活動などを行う時、模造紙を広げて活動する時においてもオープンスペースは魅力的である。
- 子どもを管理する、子どもが良く見えるという視点で学校を見ると片廊下の学校は、子どもが教室から出ると廊下の端の方から見る事が出来た。このような視点では片廊下のように教室が並ん

でいる方が教員として安心する気持ちはあるが、子どもの立場から過ごしやすい環境という視点もあるので、そこで一工夫できると 3 クラスずつのまとまりでも意識して対応できるのかもしれない。

### ウ. 普通教室廻りについて意見交換

- 教員の中にはパソコンで教材を作る人もいるが、普段の授業の中で使う事を考えると 50 インチテレビを使って教材を提示することは手軽で使いやすい。天井にプロジェクターを設置し、ホワイトボードとプロジェクターの映像が連動して動くようなものがあると使いやすいと思う。タブレットを使うのであれば、全館又は部分的に無線 LAN を入れることは必須だと思う。
- 低学年は床に座る事があるので衛生面の配慮は必要になるが、絵本のコーナーに畳やテーブルなどがあると、子どもたちはほっとできるのではないかと思う。
- 教員は目の前の子どもの様子を見てどういう動線を作っていくかアイデアを出す習性があると思う。シンプルなものに子どもの実態に合わせてプラスアルファするくらいが良いのではないか。
- 真ん中にある空き教室にみんなが集まれるようになると良いかもしれない。空き教室を物置にならないようなデザインを作り、1 つのパターンを作って示すなど、教員も建築家の思いを学ぶ必要があると思う。
- 作り手と運用する側で学校は作っていくものだと思うので、最初の段階で作り込み過ぎてしまうとフレキシビリティが無くなるのかもしれない。
- 40 人のクラスで壁（スクールパーテーション）があると机もあるので子どもたちは動けない。特別支援級の子どもが交流で来ると 42、43 人になるので、教員も動けない。机の規格が変わり、以前よりも大きく、重くなった。
- 教室が広くなるだけでだいぶ印象は変わる。

## (2) 第二回デザインワークショップにおける主な意見

### ア. 学年クラスター・普通教室廻りについて

- 図工でのりを使う時、給食でジャムパンを食べた時など手を洗うが、廊下にある流し台に行ってしまうと教員の目が届かないので、教室内に流しがあると良い。デンについて、幼稚園などでは落ち着かなくなった時に別室でクールダウンさせることがあるが、学校にも普通教室の近い場所にデンがあると教員の目が届くので良い。
- 教育相談のような部屋は別の場所に欲しい。オープン型の普通教室では教員が子どもと話しているところを他の子どもたちに見られない場所がいくつか欲しい。
- 学習の形態として調べて発表する活動はどの学年でも重要視されている。図書コーナーについては、近くにパソコン、タブレットがあると良い。御幸小は図書室の隣にコンピュータ教室があり自由に活用できる。教室で資料を調べる子、図書室で調べる子、遠くにあるコンピュータ室にあるパソコンを使って調べている子など分散して活動を行うと教員は子どもの様子を見るのが難しい。
- パソコンと図書コーナーが一体化していると便利である。壁が無く、見通しやすくと教員が1人で把握ができると思う。
- 教材庫が学年ごとにあると面白い。今まで社会・算数など教科ごとに1年～6年までまとまっていたが、学年で教材を置いてあると学年で相談がしやすい。教材庫は特別教室が無い国語、社会、算数で必要となる。
- 家具（机椅子）は将来的には500mm×700mmになると思うので、現在の図面に落として密度感がどのようになるか確認して欲しい。低学年は35人学級で行われると思うので、35人を想定して図面を作成した方が良い。子どもの持ち物をどのように収納していくかが課題であり、御幸小の背面ロッカーはランドセルと物が入られるスペースの2段になり、少し高くなっていることは危ないという意見はあると思うが、子どもの持ち物をしっかり収納させることも大事だと思う。教室のクラススペースは個人机だが、オープンスペースは個人机ではできない大きな模造紙を使った活動などのために大型のテーブルを用意することが必要である。
- 本新設小学校の竣工も数年先なので、更衣室の設置が当たり前になっているかもしれない。面積が必要になる場所だが、全国的には学年に1箇所設置が主流になる可能性が高いので、考えておくべきである。黒板については、プロジェクターの映像が綺麗に黒板に映るものがあるので、投影する場所は黒板のままでも大丈夫である。実物投影機は授業を行う上で非常に有効である。吸音性能については気を付けて欲しい。静かなオープンスペースを作ることが大事である。オープン型の普通教室であっても少し閉じて音の廻りこみを防ぐ、空いている箇所から漏れた音をしっかり吸う、天井で吸うようにしなければならない。

### イ. 教職員に対するスペースについて

- 職員室以外の休憩場所としては、狭くても良いので、休める場所があると良い。職員室は保護者や児童の出入りがあるので、飲食ができるスペースがあると良い。
- ちょっとした打ち合わせの多い職場なので、ミーティングができるスペースがあるとよい。
- 職員室の一角に飲食や教材を作るスペースとして使用できる学校もある。
- 職員室で会議ができると色々な学年の教員の様子を見ることができる。職員室がある程度コミュ

ニケーションの場になる方が良いと思う。職員室に 10 人程度座れる大きなテーブルがあると夜食を買ってきて食べるようなスペースになり、色々なコミュニケーションの場となることもある。

- 職員室にある大きなテーブルを使って教材作成などの作業を行うこともあるが、6 学年ある中で調整することになるため、気を使わずに使用できる場所として教師コーナーがあると良い。現状では印刷室にある大きな机に模造紙を広げて書くことがあるが、本来、印刷の作業スペースなので、肩身の狭い思いをしながら作業をしている。

ウ. 教職員の持ち物、収納スペースについて

- 個人で作成したプリント、本などがあると荷物は増えると思う。どの学年、どの教科に対応できるように教材を持っておくと非常に量が多くなる可能性がある。
- 学年の重要な資料については、校長室や保健室など鍵のかかるロッカーに入れるが、その他のものは教室の教科書などを入れている棚、更衣室の空いているスペースに置く人がいる。
- 普通教室の収納スペースには教科書など授業で使う資料、毎日使うものを置いている。副読本、プリント、模造紙を作る時に使用するマジック、マグネットなども置いている。

エ. 教員の業務を行う場所について

- 通知表など集中して作業をしたいものについては教室で行うことが多く、また、図工など大きな作品を評価する時には職員室に持って来られないので、教室で評価をしている。
- 教室にいて 1 人で作業をした方が効率の良い業務であっても教科研究に繋がるので他の教員と話しながら業務を行う方が良いこともとある。効率は悪いかもしれないが、話しながら、コミュニケーションを取りながら進めていく業務が多いと思う。
- 授業を行っている場所がワークスペースにもなっているが、仕事上の相談を気軽にできる関係が学年間、先輩後輩、個人的なものなどいくつもあると思う。
- 職員室以外の打ち合わせコーナーに行けばよいのかもしれないが、直ぐに資料を出す時には学年の島で話ができると良い。
- 近くにいる教員に相談したい時に職員室で話し合うので、職員室には低中高の島を作っていることが多いと思う。
- 職員室で学年会を行う学校では、机に荷物があるので話しにくい面はあるが、他の島と相談することもできるので、良い面があると思う。